

彼が意識を取り戻した頃には外は暗くなっており、窓の外に星空と満月が浮かんでいるのが見えた。ここは自分の部屋のベッドの上だ。きっとあのORが運んでくれたのだろう。そう思うと瞬時に倒れる前の記憶がよみがえってくる。100年もの時差任務の致命的な遅れ。そして、リンの死——。ORは虚偽を含む言動を一切行えないようプログラムが組まれている。だからこそどれもこれも信じ難いことばかりで、強烈な精神的ダメージに襲われ、またすぐにも倒れそうな眩暈がしてくる。

「うっ……くあ……」

吐き気をなんとか抑えて考える。ORの話はまだ終わっていないはずだ。聞かなければならない。どんなに辛い事だとしても、リンが遺した「真実」とやらを……自分が知っておかなければならない事実をきちんと受け止めてやらなければ。「必ず戻る」「また笑顔で会おう」と誓った約束を破ってしまった自分にとっての、せめてもの罪滅ぼしになると信じて。

心を落ち着けるために外の月を見た。青白い光が街と自分とを照らしていた。不思議な気分だった。昨日まで真っ暗な宇宙空間を超光速で移動し続けたことが夢の中の出来事だったような錯覚を覚える。今自分はこの世界と同じ色に染まっているのだ。けれど、この景色にリンがいない以上元の世界に戻ってきたという実感が湧いてこない。やはり今のこの現状をちゃんと理解してしっかりと受け止めなければ、本当の意味で帰ってきたとは言えない。

意を決して自室のドアを開ける。リビングにいたORがハッとしてこちらを向いた。リンそっくりのその顔とその仕草、ここに在るべきひとつの色として景色にとても馴染んでいた。

「あ……身体、もう大丈夫？」

「うん。外の景色見てたら大分落ち着いた。一応帰ってこれたんだって改めて思えたから」

「そう。よかった。さつきはごめんなさい。私、ちよつと焦ってた」

「もういいよ。僕も、君からちゃんと話しを聞かないとダメだっと思ってたし。このままでとんだか、自分がこの景色にとつて余計なものみたいに思えて、うまく言えないけど良くないんじゃないかって」

「気持ちの整理、ちゃんとついたらだね。凄いなあ、まだ戻ってきて1日も経ってないのに」

「それだけ経験値積みまくってきたってことさ。一年で百年分の年取ったようなもんだしな」

「そっか。うん、それなら矛盾ないね」

「うん、だから、さ。話してくれよ。これまでの事もリンの事も」

「……ありがとう、レン」

ORは話し始めた。これまでに起きた事の全てを。リンがレンに伝えたかった真実を——